

日本学術会議社会学委員会社会理論分科会 公開シンポジウム

「コミュニティを問い直す——社会関係資本の光と影」

(パネルによる発題)

個人化のもとで共同体はいかにして可能か

東京工業大学名誉教授 今田高俊

近代社会は個人主義化を進める傾向を有するが、これと並行して共同的なるものを保持しなければ社会は成員の連帯を失い、病理現象が多発する。

個人は自己の意図とは関係なくある家族に生まれ、地域社会のなかで育ち、他者と関係を取り結ぶことを学習する。人間社会は人びとのつながりによってしか形成されない。また、このつながりには支え合いというかたちでの共同性が確保されている必要がある。各個人は、自由主義が想定するように抽象的自由意志や排他的個人権を持った個人ではなく、つねに具体的で特定の文化的・歴史的な文脈に埋め込まれた存在である。とくにその場として、家族や地域コミュニティや自発的結社からなる共同体が重要である。

また、人は生きていく際、例外なく身の回りの事物や他者に関心を寄せ、それらと関わり合いを持ち、事物や他者からの呼びかけに応答する。こうしたことが相互になされることで人間は、自己がこの世界のなかに存在することの意味を確認する。これが支え合いと共同性の基礎であり、社会形成の原点である。

社会関係資本は、信頼、互酬性の規範、ネットワーク（絆）によって、人びとに共同性を再生させる機能を担うものである。個人主義化が進むのは近代社会の宿命であるが、この宿命に抗して人間は他者と共に生きる存在であることを認識し、支え合いと連帯の絆を紡ぐことで、自由で活力ある民主主義を機能させることができる。

合理的選択理論から見た社会関係資本とコミュニティの関係

東北大学 佐藤嘉倫

社会関係資本の分類方法の一つに結束型社会関係資本と橋渡し型社会関係資本に分ける方法がある。そして多くの研究者は結束型社会関係資本のマイナス面と橋渡し型社会関係資本のプラス面を取り上げる傾向にある（たとえばパトナムの南北イタリアの比較）。しかし社会関係資本がプラスの効果を持つのかマイナスの効果を持つのかは当事者の効用関数によって決まる。この視点から結束型社会関係資本を見ると、必ずしもマイナスの効果だけではなくプラスの効果を持つ。たとえば、東京の山の手に比べて貧しい下町で必ずしも犯罪が多くないのは、下町の住民の間の結束型社会関係資本が防犯効果を持っているからだと考えられる。

このことから、高いレベルの結束型社会関係資本を有するコミュニティはそのメンバーにさまざまな便益を提供すると考えられる。しかしその一方で、そのようなコミュニティはメンバーの自由を拘束する危険性も有する。このように考えると、メンバーにとって望ましいコミュニティとは、結束型社会関係資本と橋渡し型社会関係資本のバランスが良くとれているものであろう。ただしメ

ンバー間の異質性を考慮すると、話は複雑になる。結束型社会関係資本を重視するメンバーと橋渡し型社会関係資本を重視するメンバーとでは望ましいバランスについて意見が異なる。この問題が社会関係資本とコミュニティの関係を考える際にクリティカルになる。

ネオリベリズム、脱政治化とコミュニティの危機

九州国際大学元教授、福岡県議会議員 堤かなめ

世界規模での市場経済化や大幅な規制緩和を促すネオリベリズムは、1980年代に台頭し、公的介入や公共部門を小さくすること（＝脱政治化）を求める。同時に、グローバル資本主義の深化とともにグローバル化する諸課題の解決に無力な国内領域に留まる政治的諸勢力への失望、メディアが喧伝する欺瞞や汚職にまみれた政治家への嫌悪等により、先進デモクラシー各国では共通して、政治不信や投票率の低下など「脱政治化」が生じる。

近代社会の成立以降、農村や職人組合といった「伝統的コミュニティ」が衰退し、その代替的機能を果たすべき「中間的コミュニティ」は、「第二のムラ」といわれる都市での町内会・自治会も、初期には高い結束力を有した労働組合も、「新しい社会運動」型の「選択縁コミュニティ」もまた、グローバル化やそれに伴う受益圏と受苦圏の分離（梶田・船橋）に対応する社会資源の動員が困難な状況にあり、「コミュニティ」は危機的状況に陥っているのではないか。

国家間および国内での経済的・社会的両極化が進行するなか、圧倒的な社会資源と社会関係資本を備え持つパワー・エリート（Charles Wright Mills）は「コミュニティ」を形成していると言えるのか、「共同性」「公正性」「共通善」を希求する個人は、いったいどのような「コミュニティ」を形成し得るか、「グローバル・ユニオン」なのか、「公正なグローバル化」を求める市民運動なのか、社会学的分析と関与が求められている。

寛容から問うコミュニティ

九州大学 三隅一人

社会関係資本は、社会構造の諸資源が構造内の人びとの利益（幸福）増進的な協力的行為を促す、ポジティブなメカニズムを照射する。それに対して多くの論者がそのダークサイドに注意を促してきた。実際、そこに支配や社会的専制の問題をみるのは容易である。コミュニティの概念は公共性と共同性の調整を主要課題としており、それは社会関係資本のサニーサイドとダークサイドの調整問題に直接的に重なるので、とりわけ注意が必要である。とはいえ、ダークサイド社会関係資本理論なるものではなく、多くの関連議論は中間集団問題に関連する諸々の社会学理論の中に分散している。こうした理論状況の下で、前述のコミュニティの課題を社会関係資本論からうまく主題化するために、本報告は寛容という視点をおく。コミュニティは、共同関心にもとづく共感能力を基軸とする。異なる他者同士がぶつかり合う領域が、一定の公共領域として了解し合えるための基盤である。社会的多様性は一方で、対立、差別、排除等の力学を生む。それを抑制しながら、社会的多様性の互恵的共存を実現するためのぎりぎりの調整点が、ここでいう寛容である。報告者は、寛容な連帯の視点から現代的コミュニティの条件を探ってきた。そこには、社会関係資本の結束型と橋渡し型の蓄積プロセスの調整とともに、ダークサイドとの調整課題が織り込まれており、社会的多様

性と社会関係資本の関係を統合的に捉えるには好都合である。

合意に至らないコミュニティの可能性

一橋大学名誉教授、成城大学名誉教授 矢澤修次郎

ある研究者によれば、ディシプリンとしての社会学を特徴づけるものを一つだけ挙げるとすれば、「共同体 (community) の称揚」になるという。社会学はその成立当初から、コミュニティを連帯、信頼、オートノミーの基盤を提供するものと捉える共に、近代化の過程においてそれが社会によって取って代わられることを明らかにしてきた。しかし社会の時代においても、その背後には、強い共同体の希求があったことは、否定できない。共同体と社会の関係は社会学を貫く太い赤い糸であることは間違いない。

後期近代、ポスト・モダン、グローバル化の時代に、人々は再び共同体の探求を行い始めた。これは、近代化の帰結として「社会の喪失」が起こり、過って連帯、信頼、オートノミーの基盤を提供した共同体に再び注目が集まったのであるから、理の当然であろう。しかし希求される共同体は、共同体の伝統的な文化、慣習、道徳、結合原理からの離床が進行したために古い伝統的な共同体ではありえない。新しい共同体は、テクノロジー、知識、イメージなどのグローバルな過程によって形成されるほかない。だとするならば、そこにおけるコミュニケーションは、概念的、ノンバーバルなものであるから、過っての共同体が果たした機能を果たすことは不可能である。

要するに今日の共同体論は、新しい文脈と意味を見出す必要があるのだろう。本報告は、今日提出されている様々な共同体論を検討し、それらを見出す試みである。とりわけ Bill Readings の「一つの統一的な観念に依拠することなしに社会的紐帯を作る」場所としての共同体論に注目する。これは、新しい共同体と社会の関係を探る試みである。

参考文献 Gerald Delanty, *Modernity and Postmodernity*, Sage Publication, London, 2000